

平成 22 年 1 2 月

[配布先：全組合員]

市場情報

「日 時」 平成 22 年 1 2 月 1 0 日 (金) AM. 1 2 : 0 0 ~
「場 所」 東京「鉄鋼会館」
「出 席」 酒匂委員長他 1 9 名(最終頁参照)
「経 過」

1. 酒匂委員長挨拶

今年の市場環境は、言うまでもなく我々シェアリング業にとって誠に厳しい状況が続き、先行きに希望が持たず我慢を強いられた 1 年間であった。ミクロで見れば何とか底を脱した需要家も散見されるが、ほとんどの業種が底割れ状態のまま推移した。こうした中、シャー業界では平成 2 1 年春以降、急増した過剰在庫の調整に取り組み、ようやく今年前半に至り需要に見合った在庫レベルまで減少した。あとは需要の回復待ちだが、公共投資の縮減や国内製造業の空洞化、株安・円高、政局不安定など残念ながら明るい材料は極めて少ない。引続き来年は経済も政治も不安定な年になると思うが、来年の今頃はこれらの悪い予想がすべて外れ、前年より良かったと言える平成 2 3 年になることを切に祈るばかりである。組合員の皆様さんには、来年に備えるべく、この年末、年始で十分鋭気を蓄えていただきたい。来年もご協力のほど宜しくお願い致します。

(京浜産業社長)

2. 各地区の需要動向

北海道

遅く厳しい回復への道のり

樹木を積雪の重みから守るための雪吊りや雪囲いなどの冬支度が終わり、札幌市街地では初冬の風物詩となっている色とりどりのイルミネーションの輝きが観光客や市民の目を楽しませている。

こうした中、道内景気回復の道のりは想定以上に遅く厳しい。主要産業である農水産業は、いずれも異常気象の影響で不作や不魚の様相。鉄鋼業界についても、米びつを潤わせる建築・土木向けの建設需要は未曾有の厳しい環境が続いており、冬眠（季節要因による閑散期）への準備蓄えも出来ないまま凍てつく厳冬を迎えることになりそうだ。

【鉄 骨】 建築着工統計の平成 22 年 1～9 月実績から推測する道内の鉄骨数量は、合計 89,800 トンで過去最低水準であった前年同期に比べ 1.8% 増と、わずかながら上回った。

一方、需要の先行指標となる 1～11 月の北海道機械工業会鉄骨部会道央支部の共同積算数量は、99,119 トンで前年に比べ 19.3% 上回った。（H19 年同期 199,253 トン・H20 年同期 185,071 トン・H21 年同期 90,513 トン）しかし、期待された民間大型プロジェクトの始動は、すべて来春以降へズレ込み。新規中小物件の見積もりについてもさらに少なくなり、ゼネコンの指値は依然として極めて厳しく先行きの見通しは不透明である。現状の手持ち仕事は、下位グレード・ファブになるほど深刻な状況で、これから冬期間の閑散期を迎えることから、一次休業を模索しているファブが多くあるものと見られている。

道東地区では、約 2,000 トンの大型物件に対し鉄骨単価が厳しいことから

地場の大手ファブは、すべて辞退し道外ファブが受注した。地元ファブは、工場を稼働させるため赤字覚悟で下請け受注しているという。

【橋 梁】 ゼロ国債・補正予算分と、今年度本予算による国並びに道を合わせて推測された鋼橋梁の発注数量の約 12,000トンは、ようやく発注がほぼ完了した。これは前年に比べて数量は半減したことに加え、低価格で保留されているケースもある。一部入札では、相変わらずジャンケンやくじ引きが行われ、運不運が大きく作用する受注の偏向も相俟って、未だ受注 0 の業者もある。

やはり、ゼロ国債や補正予算、橋梁の延命対策や耐震補強、維持補修などの火急、かつ速やかな発注が切望されている。

【切 板】 道内における切板需要は、大半を占める建築鉄骨や鋼橋梁の大幅な減少とともに、物件の小型化もあつて小ロット多品種・小物・型や異型が中心となり納期は短縮の傾向にある。今年の場合は、秋口から冬場にかけての盛り上がりが見られず、各社とも低操業を余儀なくされている。

先行きの見通しについても不透明感が強い。新規の中小案件は少なく、予定されている大型物件の始動は来春以降と見られる。従って、数量的な枯渇感が一段と顕著になり、深刻な事態に拍車がかかるものと憂慮されている。

切板価格の状況は、ゼネコンの受注競争のエスカレートに伴い、道内外ファブの受注競争も熾烈となっている。鉄骨単価の採算割れは、当然のことながら大型物件になるほど影響度を増す。重要なトレーサビリティ管理問題は影を潜め、一部の大型工事で電炉材の使用が容認され、高炉材使用の切板についても本州シヤ一切板価格と同水準の指値となっている。

“角重量単価、実重量エキストラ加算単価”で大幅な値差は歴然としている。この先、需要不振に加え価格が採算ラインを大きく下回る下落は閑散期に入ると、さらに悪化の進行が予想されるだけにより現状の看過は絶対に許されない。

厚板原板は、高炉メーカーにより価格対応がまちまちであり、道内の切板価格は本州価格に対し大きく乖離している。一番の原因は、素材価格の値差が大きく波及している。マーケットのグローバル化の時代、北海道価格を廃止、全国「一物一価」の均等な素材価格で公正な競争を望むところである。

道内の建設業界は、民間の設備投資の遅延に伴う希少物件に対する過当競争。長期の公共投資の縮減による関連業界の疲弊は著しい。厳しい経営環境のもと、与信問題は、より一層深刻な事態を増しそうなことから年末の企業倒産の増加が懸念されている。

(玉造・西村卓也)

東 北

耐震補強工事、大間原発で凌ぐ

東北地方は、冬支度が始まり蔵王連峰では早々に積雪がありました。今年の夏が猛暑だっただけに、特に寒く感じられます。

市場の状況は、いまだに厳しい状態が続いていますが、ファブの山積みは大小差が有るようです。小型物件と学校等の耐震補強工事、青森の大間原発関連でなんとか来年1月迄は確保している様ですが、2月以降はまったく物件が見当たらず先行き不透明感が払拭できない状況で、当然シャヤーの稼働状況も年内は80～100%ですが、来年1月以降が見えて来ない状況です。

仙台地区も8月に仙台トラストタワー(地上37階)がオープンした後の、大型ビル建設は落ち着いてしまっており、新築オフィスビルの空室率は55.6%と高く全体平均では20.1%となっています(10月末時点)。

市内を見てもタワークレーンは殆んど見えず、空き地利用のコインパーキングが目だっています。来年3月着工のNTT青葉通りビル(20階)が現在唯一の大型案件であり、厳しい状況はまだまだ続きそうです。

(J F E 鋼材・庄子悟)

東 京

今年以上に厳しい来年の建設需要

(1) 平成 22 年 9～11 月実績

【全 体】 橋梁を主体とするシヤーと鉄骨を主体とするシヤーで稼働が 2 極化しており、橋梁主体は極端な低稼働で臨時休業で凌ぎ、鉄骨主体は休出+フル残業でも追いつかず、外注出しで何とか対応している状況。

【橋 梁】 今年度の橋梁発注は、当初の 20 万トレベルから 25～26 万トとやや上方修正されるとの見方であるが、上期の入札で関東ファブがことごとく逸注したことから、下期入札の本格化が補正予算の遅れもあり、遅れている（12 月以降？）ことから、各シヤーの加工量は、月々 2 千トレベルと、悪かった昨年の半分のレベルとなった。

【鉄 骨】 首都圏大型案件は、4 月頃から地下部、8 月から地上部の発注が本格化し、8 月以降急激に立上がった。足元の各 S ファブの加工は完全にオーバーフローしており、自社の橋梁工場や橋梁専門工場に外注だしをして凌いでいる。建材部会メンバーの加工量も 9 月 5 千ト、10 月 6 千ト、11 月 5.8 千トと、超フル操業レベル。

(2) 今後の動向

【全 体】

橋梁が全く回復の見込みが無く、鉄骨が来年以降急激に落ち込むことが予想され、来年以降は、今年以上に厳しい状況が見込まれる。

【橋 梁】

- ・全体が 25～26 万トとなり、12 月以降の入札がそれなりにあるとの見方はあるものの、年度内加工はほぼ絶望的であり、年度内は足元の極端な低レベルが継続する見込み。
- ・来年度以降は不透明ながら、今年度レベルにも行かないとの見方が強く、

20万トンレベルとなるとの見方もある。

【鉄 骨】

- ・ 現在動いている大型案件に続く案件が全く動いておらず、GC営業や設計事務所は閑散とした状態。従って、首都圏超高層案件のSファブ指定の部分（地下部と低層階）は、年内がピークとなるものの、年明け1～2月以降は一気に減少する見込み。
- ・ 今後は、上層階（Hグレード可能、コラム+H構造主体）に移るため、Hグレードの上位ファブに仕事が集中するみこみ。
- ・ 加えて、ファブの与信問題から、GCが商社鉄骨の起用を増やしており、商社も与信面からHグレード上位ファブ中心に仕事を入れていることから、4月以降の特定ファブはオーバーフロー状態にあり、一部受注を断り始めている模様。

(J F E 鋼材・井澤純司)

東 京

建産機、外需依存で回復続く

[全体]

新興国向け輸出に依存した製造業の回復基調は持続しているが、現地生産や海外調達強化、円高による競争力低下等の要因により、その伸びは鈍化し、一部は減少している。この地産地消の流れは、国内生産の縮小に直接結びつくものであり、1～2年以内にはシャアの受注に大きく影響する不安材料である。一方内需は依然低迷が続いており、さらに景気対策の息切れが景気の下押し圧力となり、しばらく回復は期待できそうにない。

【建設機械】

建設機械の10月出荷額(日本建設機械工業会調査)は、前年比+54%で10ヵ月連続の増加。相変わらず輸出依存型が続いているが、内需も4ヵ月連続増と

底を打った兆しも出てきており、今後の動きに多少期待できそうである。

①油圧ショベル

主力機種であるショベルは、概ねピーク時の70%前後まで回復、当面堅調が続く見込み。しかしながら、基幹部品の調達力の差が生産に直結しており、計画の下方修正を余儀なくされるメーカーもある模様。

②鉱山機械

世界的な資源需要を背景に、ほぼピーク時に近いレベルまで急回復。超大型ショベルや大型ダンプは下期からさらに右肩上がりの計画になっており、シャーは急激な増産への対応に苦慮するケースも見られる。

③建設用クレーン

主力機種のなかで唯一前年比マイナスが続く機種であるが、10月によりやく底を打ったようである。メーカーの需要予測や生産計画をみると、11年上期は前年比プラスとなっており、在庫調整完了後の実販レベルでの加工量に期待。

【板金・鍛圧機械】

パンチング・レーザーは、ピーク時比70%程度まで回復。一方プレス機械は、円高による価格競争激化で、足元は大型・小型ともに受注低迷。中国向けの大型プレスを受注したものの、全部品を現地で生産するケースも出ており、シャーの加工には結びつかない悪い例が今後増えそうだ。

【重電】

重電分野は、今年度に入り受注の低迷が顕著になっている。しかし原子力案件については海外調達の動きも一部にあるが、24年度以降への期待は大きい。

【産機店売り】

産機店売り分野にも円高の影響が表れている。一例ではあるが、半導体製造装置関連の受注に11月から変調が生じ、為替の影響で需要家が逸注し、切板発注のキャンセルになったケースがある模様。店売り分野は相変わらず閑散が続き、切板市場は縮小状態から依然脱却できていない。 (ニューエイジ・池田啓志)

東 京

八方塞がり

浦安地区の状況は、仕事少なく、荷動き超閑散で、出入りのトラック台数もピーク時400台/日が、足元200台に半減している。在庫は総じて低水準も、耳付き板が増加傾向。納期は2～3日程度。与信不安も増しており、手放しでは販売できない状況。
(三ノ橋鋼材・角田善彦)

東 京

厳しい現実

建産機は底堅く推移しているが、中小建築案件が相変わらず低迷しており、建築系シャーは大変厳しく、この1年間ずっと50%稼働が続いている。足元の受注は量的にはある程度出ているが、指値が安い。中小ファブの山積みは、3月以降全く不透明である。需要不振とメーカー値上げで、材料申し込みもできない。100年に一度の不況がこれほどまで現実になるとは・・・。
(丸東興業・秦弘志)

東 海

な　か　な　か　光　が　見　え　ず　・・・

中部地区10月から12月の建産機向ヒモ付シャーの動向は、

【建　機】

リフト　：今年の下期当りからピーク時の7割ぐらいの生産を維持しており、落ち込みが少なく安定している。

クレーン　：円高の影響が出たのか秋口より大小クレーン共、月を追って悪くなり、特に月2～3台あった大型クレーンは現時点で、まったく注文がこなくなった。

トラック　：補助金が終わった後も生産は落ちる事もなく安定している。

【産 機】

鍛圧プレス：来年 3 月以降の生産は未定であるが、現在は、家電向の小型プレスが中東向に安定した生産を続けている。しかし大型のプレスは減っている。

I T 専用機：I C などのチップは年によってモデルチェンジをするので、作り貯めしながら生産を続けていたが、9 月に生産調整が入ってから注文量が半減して現在もそれは続いている。

【造 船】

デッキクレーン：来年一年間は仕事がある。中国と日本で作っているが当初は中国生産がメインと考えられていたが、生産計画が発表されたら、日本がメインになっていた。値段よりも品質の良い日本製が中心になった。

【昇 降 機】 4～5 階建のマンションなどに使用される大量生産の昇降機は相変わらず低調である。しかし、高層階向の昇降機、特に輸出が好調であるため、生産はピーク時の 6 割ぐらいにとどまっている。

【鉄道車両】 アメリカで 160 輛、決定したが、当初上物は、アメリカ生産で車台は日本生産とされていたが、車台もアメリカでの生産という話も出て来た。

ヒモ付シャーで総じて言える事は、一部好調な造船などを除いたら、来年の生産が不透明になっていて、海外への生産へシフトをしています。又、仕事があってもミルシート管理や、配送、納期の細分化などで、ヒモ付シャーであってもコンスタントに利益を出す事が出来なくなってしまった。

単価においても、同一会社で海外と日本と同じ製品を作るため、海外の単価に合せられないかとのユーザーからの強い要望が出ています。

一方 店売シヤーは、今年は受注のある、なしの波が激しかった。3～4月は仮需が出て来て少し良く、6～7月はヒモ付の好調な輸出の落ちこぼれを拾い 10～11月は省エネラインの設備投資や天井クレーンなど、又 金型も出たりした。雇用調整金は去年の今頃は、ほとんどの会社が活用していたが、今年に入り3割の会社を残して平常営業に戻っていた。

しかし、11月中旬以降仕事が落ち込み、又 来年の仕事が見えない為もう一度雇用調整金を活用しようという会社が出てきた。

又、変わった話としては朝鮮半島の砲撃問題から韓国で作っていた製品を日本で作れないかという話も出たが、日本で作ると韓国より3割も高く、韓国価格に合せると、とても日本では、利益が出ないと言う結論になった。

店売シヤーは、高炉・電炉などによる母材単価が常にバラバラで、それに輸入材が加わり、切板単価にした時に利益が出せる単価で売る事が出来ず、厳しい経営を余儀なくされている。加えて、店売ユーザーの経営も厳しく、特に年末から来年3月までは与信管理に予断を許さない状況になっている。

(鈴将鋼材・鈴木康司)

東 海

ゼネコン安値受注と母材値上げの狭間で

東海地区の建材シヤーの現状は、メーカー系列のシヤーでは名古屋の工場が一番業績が悪いという状況が続いています。ただし、悪い状況に変化はないといいつつも足元はある程度の仕事量があるところ、営業テリトリーの関係で100%稼動となっているところもあるといった状況です。

工場稼働率は各社さまざまといった状況のなかで共通して言えることは、この先は物件情報が少なく、仕事量も製品単価についても状況がまったく読めないため、来年度の計画を作る時期にきていますが、どうしていいものか各社苦慮しているといった状況です。

東海地区はもともとこのファブにはこのシヤーという様な需給環境でしたが、需要家も従来の商流よりも利益確保を優先せざるをえないことから、ロイヤリティの高い需要家であっても価格対応をしていかないと従来通りの受注は難しい状況になっています。

メーカー系列ではなく、独立系の組合員からは現在の素材価格からすると加工賃がまったく合わない切板単価であっても今までは価格対応してきたが、現在のような状況が続けば経営もかなり圧迫されてくるため、何らかの結論を出さなければならなくなる、という厳しい意見もありました。

鉄骨建築物件のゼネコンの受注単価が、物件が少ない中での受注競争でかなり低価格で受注され、ゼネコン自体は赤字にならないようにファブに仕事を押し付けるといった状態ですから、こういった物件の切板単価はファブも赤字額を減らすため、現在の素材単価を考慮するはずもなく、指値に近い様相で希望購入単価対応を迫ってくる状況です。

ファブリケーターも仕事量を追い受注量を増やしますと赤字額が膨らむ危険性が高いことから、受注量を調整していることもこの先の見通しを不透明にしている要員でもあります。物件が少ない東海地区で来年度に予定されている著名物件は、設計事務所の予想工事単価の半値以下でのゼネコンによる受注情報が流れているため、年度内ばかりでなく来年度の市況も混沌としたものになるかもしれないと心配されます。

切板単価の下落の話はあっても、切板製品の値上げ要素がまったく見受けられない状況の中で、高炉による鋼材価格の値上げが発表されていますので、ますます低価格のしわ寄せは切板製品加工賃にのしかかってくることも予想されるため厳しさが増す可能性もあります。

東海地区の橋梁の状況につきましても現状は6～7割稼働と横這いの状況が続いていますが、仕事量や稼働状況は橋梁メーカー次第で左右されるということと、橋梁向け切板製品単価も鉄骨工事物件向けの単価に近づいてきて

いるとのことでした。

橋梁物件の今後の仕事量などもやはり建築と同様に先行き不透明ということになっているそうです。

各社の在庫量は少ない仕事量に対応してかなり絞っている状況で多いところで4ヶ月、少ないところで1ヶ月ですが、2ヶ月ほどというところが多い状況です。
(中部鋼鉄・加藤一修)

大 阪

体力消耗から倒産・廃業懸念強まる

【全般】

(1) 需要

①世の中全般は各種指標にも見受けられるように、大企業は回復し業績も良くなってきているが、(下期は不透明な要素が増え、慎重になっているが)、我々シヤー業者は依然、低迷したままで荷動きも悪く明るい兆しは見受けられない。

②ただ、鉄骨・建機の一部で忙しくしている会社もあるが、中小シヤーの大半はその日暮らしの様相を呈している。

③仕事量が少なくなり、雇用調整金で何とか凌ごうとしているが、短納期・小ロットが増えており、間に合わせるために残業して対応せざるを得ず、忙しい思いはしても収益は改善していない。

(2) 価格

①高炉メーカーは輸出主体に好調であることから、一般市場にはあまり目を向けておらず、相変わらず、温度差があるものの、水面下で安値の話も聞かれるようになってきた。

②需要家によっては価格がまだ下がると思っている所が多く、見積りは出してもなかなか制約にはいたらず、そうこうしている内に東鉄材でも

合わなくなっている。(切板価格と素材価格が、あまり変わらないような物も散見される)

(3) その他

- ①需要の低迷が続き、特に中小・零細企業の体力が消耗していることから、倒産・廃業等が増加【参考】11月の企業倒産 — 東京商工リサーチ してきており、更に広まるのではと懸念される。

【需要部門別】

(1) 橋梁

- ①今年度の発注は昨年度並といわれる中、受注が一部のFABに偏っているようで、我々にどれ位回ってくるかであるが、あまり期待できない。
②ただ足元ではさすがに少しずつではあるが、増加傾向にあるものの相変わらず明細の判明もずれ込むことも多く、操業に苦労している。

(2) 鉄骨

- ①大型物件を扱っているところは忙しいが、利益無き繁忙といわれ、操業度は確保するものの利益はほとんど無く逆ザヤになることもある。
②ゼネコンが鋼材価格の動向と納期から、出し渋っていたと思われる物件が見受けられるが、短納納期に加え価格も安い、仕事がないだけに操業度確保のため受注している面もある。

(3) 建機

- ①各社、中国での生産が追いつかず、日本で応援していたが、建機メーカーによってはピークををすぎ、減産傾向にある。

(4) その他

- ①足元では仕事も無く、市況も下がり気味で困窮としており、また今後の展望も開けず明かりが、見えない中、高炉メーカーが原材料のUPに対する価格により、ますます苦しくなってくる。
②特に自動車や造船が値下げを要求し、今後の成行き如何ではあるが、

我々弱い立場の物は常においていかれる可能性が高く、一段と市況との乖離の中で活動していかなければならない。

(シーヤリング工場・佐々木泰司)

九 州

安売り回避、適正粗利の確保を重視

【産 機】

業界紙等では国内鉄鋼メーカーの好転、軒並み経常黒字が取りざたされております。

全国工作機械メーカーの受注量も月を追うごとに伸びており、中でも工作機械類は、NC旋盤(前月比+15%)、専用機(同+50%)が伸びをみせております。前年同月比で見れば260%~270%となっております。

また、機械の受注が伸びれば当然機械工具部品の受注も同じく伸びております。超硬チップ、超硬カッタの伸び率が非常に高く、前年比では200%前後となり、これは非常に硬い素材の工具にて加工時間の短縮の狙いと聞いております。機械、工具類も相変わらず外需が主体となっているようです。

【九州地区】 まだまだ満足できる量は確保できておらず、依然、短納期小ロットと納期を守る為の残業・夜勤作業にてコストUPになっております。

また、切板価格も電炉メーカーの発表の影響がでておりますが、ここにきて安売りは少しずつ姿を消しつつあるようです。

9月からコンスタントに価格を引き上げているところもあり、安値は受注しない方向にあります。高炉材の価格から言えば一部納得できる販売価格、粗利確保はできてないところもあるようですが、低速ながら価格トレンドは上向きといえるでしょう。

在庫につきましても ほとんどのシャーは1.5カ月、多いところで2.0ヶ月程度です。在庫バランスが悪く、歯抜けもでてきているようです。稼働率も60%~90%となっております。

【建機】 各メーカーは増産に入っているが ほとんどが外需で、国内需要は伸びる気配はない。夏以降、アタッチメント関係にて高級鋼に材料の販売が1~2割伸びてきている。高級鋼の使用により軽量化を図る動きもあるようです。

* * 安値販売はしない、適正粗利の確保を重視する意見が多くなった。

(門倉剪断工業・白水正幸)

九州

まだら模様

溶断業界を取巻く環境は最悪である。

第2Q後半から第3Qにかけてメーカーの値上げ玉が入荷したが、足元の電炉メーカーの値下げにより、上げるべきタイミングに弱含みに転じてしまった。仕事量が少ない為、ユーザーからの値下げ要望も強く上げきれる環境にない。

造船と建築分野はまずまずの仕事量を持っているが、その他の分野では低調とまだら模様となっている。造船各社はまだ2年~4年分の受注残を持っており、また、この上期においても輸出船受注量は年換算で1年分の契約量を上積みした。

建築では10月の非居住用着工面積が586千㎡と平成21年の344千㎡の170%で平成20年の507千㎡も上回った。

1月~5月平均の356千㎡から6月~10月平均は505千㎡と142%と増加している。

鉄骨需要も秋口より本格化しており、建築系シャーは何とか仕事が埋まってきた状態にあるが、価格を上げる程の稼働率には至っていない。

橋梁案件も九州に落ちる物件は少なく低調に推移している。

産業機械関連は輸出向け物件を受注しているところは忙しいが、これは一部の会社であり、受注確保に躍起になっている会社が大半である。

1 / 2 9、シャリング工業組合 九州支部の報告（出席：1 4 社）

***工場稼働**

5 0 ~ 6 0 %（2 社）、6 0 ~ 7 0 %（3 社）、6 0 ~ 7 0 %（3 社）、
7 0 ~ 8 0 %（3 社）、8 0 ~ 9 0 %（5 社）、9 0 %以上（1 社）

前回（8 月末）時点では 5 0 % 台と 6 0 % 台が大半であったので、稼働状況は上向いている。

- ・ 1 1 月の稼働はまあまあであるが 1 2 月・ 1 月と先が読めない状況。
- ・ 在庫については削減の努力をしたため、かなり低いレベルとなっている。
- ・ 価格については安値受注回避を目指しているが、前回とあまり変わっていない。鉄骨案件で安いものもあるが、各社の自覚が大事である。

豊鋼材工業・橋本勝美)

3. 理事長の感想

来年のマーケット、今年とほぼ同じボリュームでいこう。構造不況に直面する鉄骨は能力 7 0 0 万トンに対し、2 3 年度需要量は 4 0 0 万トン程度で、橋梁も今年並みの 2 0 万トン程度にとどまりそうだ。ピーク比 7 割まで戻してきた建産機は、外需次第ではあるが、トータルでは漸減傾向を辿るだろう。これまでいろいろな場で、シャーは 6 割操業体制を目指して活路を拓くしかないと話してきた。現下の需要低迷が来年も続くとすれば、優勝劣敗の事態に直面せざるを得なくなる。不況が 3 年続くと体力維持は困難だ。今後、個々のシャーがデリバリーの効率化と切板加工技術の合わせ技でユー

ザー・ニーズに愚直に伝えていくしかないだろう。また、メーカーのスタンスが非常に分かりずらくなってきている昨今、我々としては市場の動向を適宜メーカーサイドに伝えていく必要がある。来年も委員各位からの地区報告を宜しく願いたい。

【お詫びと訂正】

東海地区からご報告いただきました「なかなか光がみえず」（鈴木鋼材・鈴木康司社長）の稿において、事務局の編集（文字変換）ミスにより、10数か所の誤字脱字が発生し、そのまま新年号として印刷・発送してしまいました。本件に関し心よりお詫び申し上げますとともに、当組合ホームページ（TEKKOO.NET）上にて、全文訂正し掲載させていただきます。

（参考） ≡ 出席者 ≡ （順不同敬称略）

酒 匂 委員長

高 木 理事長（ゲスト）

林 東海支部長（ゲスト）

吉 里 理事・総務委員長（ゲスト）

北海道 西 村（玉 造 株）

東 北 庄 子（J F E 鋼 材）

東 京 秦 （丸 東 興 業）

池 田（ニューエイジ）

井 沢（富士鉄鋼センター）

角 田（三ノ橋鋼材）

原 （原シャリング）

	菊 地 (神鋼鋼板加工)
	青 柳 (青柳鋼材興業)
東 海	加 藤 (中 部 鋼 板)
	鈴 木 (鈴 将 鋼 材)
大 阪	佐々木 (シーヤリング工場)
九 州	白 水 (門 倉 剪 断 工 業)
	橋 本 (豊 鋼 材 工 業)
事務局	柘 野